

2020 年度名古屋大学学生論文コンテスト

佳作受賞

大学受験をする高校生の進学塾に対する評価とその形成要因

教育学部1年 藤井 香帆

大学受験をする高校生の進学塾に対する評価とその形成要因

1. はじめに

1.1 背景

日本において、塾産業は我々の生活の中に定着しており、様々な形で日本の教育を支え続けている。小宮山（1993）によると、戦後の高度経済成長や日本の学歴社会・高学歴志向などといった要因が相まって、日本の塾産業は他国と比べて大きく発展した。塾は日本独特の文化ともいえるだろう。

塾といっても、受験指導を行う進学塾、学校の補習を行う補習塾、進学塾と補習塾の両方の部門を併せ持つ総合塾、成績不振や登校拒否の子どもを受け入れる救済塾という4タイプに分けられ（小宮山、1993）、さらにここ10年で、個別指導塾の台頭、ITの教育活用、異業種からの参入（千葉、2017）など、塾は大きく形を変えながら、今も成長し続けている。またベネッセ教育総合研究所（2017）の調査では、小学生の49.1%、中学生の57.0%、高校生の36.3%が通塾しているということが分かっている。塾には一定の需要があるといえよう。

1.2 動機と目的

なぜ子どもは塾に行くのだろうか。子どもが塾に通う理由として、小宮山（1993）は、①塾が情報交換をするサロンのような場所になっていること、②学校の授業に不満がある子どもにとって、補習塾がそれを補完する役割を果たすこと、③進学塾の場合、「塾に行かないと合格できない」または「学校の授業だけでは不安」という状況があること、という三点を指摘している。このうち本研究では、三点目に着目した。確かに中学受験では学校が受験指導を行うことはなく、高校受験の場合も、受験指導があってもそこまで入試に特化した授業は行われないので、学校の授業では足りないと感じたり、塾に行かないと不安になったりして当然である。一方大学受験の場合、進学校では特に、学校の授業で中学受験や高校受験の時よりも多くの時間を割いて受験対策をするケースが多く、また試験においても、高校の学習範囲から完全に逸脱したような出題はされないはずだ。そのため、中学受験や高校受験と比べて塾に行かなくてはならないという状況は生まれにくいと考えられる。しかし、それに関わらず、多くの高校生が塾に通っている現状がある。小宮山（1993）は大学受験についてはあまり触れておらず、他の研究でも大学受験と塾の関係性を論じたものは少ない。

そこで、本研究では大学受験生が通塾する理由に注目し、一つの仮説を立てた。それは、学校が十分な受験指導を行っていたとしても、大学受験をする多くの高校生には「塾に通えば安心」「塾に通えば絶対に合格できる」といった意識があり、この意識が通塾を促進しているのではないかというものである。つまり、彼らは学校での受験指導を当てにせず、進学

塾に絶対的な価値を見出しているのではないか、ということだ。しかし一方で、一切通塾せずに受験に向かう人も少なからず存在する。これは、進学塾に対する評価に、何らかの理由で差異が生まれていることによると考えられる。

よって本論では、既に受験を終えた大学生へのインタビュー調査の結果を基に、大学受験をする高校生が進学塾に対してどのような評価をしているのかを検討する。またその評価の形成にはどのような要因が関連しているのかを明らかにする。簡略化のため、以下本論では「塾」とは進学塾のこととし、補習塾や総合塾、救済塾は含めないものとする。

2. 調査方法と結果

2.1 調査の概要

本調査では、高校生の時に一般入試を受けて大学に入学した学生に個別インタビューを行った。調査対象者は、現役で一般入試に合格した名古屋大学の1年生5名である。内訳は、進学塾に通った学生3名と、通わなかった学生2名であり、また進学塾に通った学生の塾の形態を、集団指導（大手）、個別指導、映像授業の各1名ずつに分けて調査を行った。下に属性情報についての表を記載した。

対象者には、あらかじめデータが匿名で個人が特定されることはないと伝え、データ公開の了承を得ている。

また分析する上で、通塾した学生をAグループ、通塾しなかった学生をBグループとし、個人名についてはA1、A2、A3、B1、B2というように表記する。

表 1 調査対象者の属性情報（性別、所属学部、塾の種類、出身地）

	性別	所属学部	塾の種類	出身地
A1	女性	文学部	集団指導	愛知県名古屋市
A2	女性	法学部	個別指導	愛知県春日井市
A3	女性	教育学部	映像授業	愛知県名古屋市
B1	女性	法学部		岐阜県瑞浪市
B2	女性	教育学部		三重県四日市市

表 2 調査対象者の属性情報（出身高校・課程、家庭の金銭状況、通塾しやすい環境か）

	出身高校・課程	家庭の金銭状況	通塾しやすい環境か
A1	公立・普通科	○	○
A2	公立・普通科	○	○
A3	公立・普通科	○	○
B1	公立・理数科	○	○
B2	公立・普通科	△	×

2.2 調査結果

(1) 塾に対する評価

この節では、塾に対してどのような評価や印象を抱いていたのかを明らかにする。

最初に、通塾していた学生について検討する。今回の調査では、それぞれ異なる形態の塾に通った学生にインタビューを行ったが、それにも関わらず、その3名の間には共通する点が見られた。

まず、塾が学校と比べて「受験対策」に特化していることに信頼を置いているということである。対象者に、塾の授業の良い所を尋ねたところ、以下のような回答が得られた。

A1：(学校の授業は)教科書をただ読むだけみたい。 (中略) 緩急がないというか、淡々としてて。でも塾の授業だと、もっと学校よりも解説が丁寧だったかもしれない。

A3：入試問題を徹底してやってくれる。学校はやっぱり、全部をばーってやっていて、入試問題は最後の方、3年の終わりの方に触れてくれるけど、あまりやってくれないから。

教科書に沿って授業を進めることが多く、緩急のない学校の授業に比べ、塾は受験対策だけに焦点を置き、必要な情報だけに絞って丁寧に教えてくれる。この点が通塾している高校生にとって重要であるようだった。特に注目すべき点は、3人全員が「プロ」という言葉を使い、「塾=受験のプロ」と表現していることだ。

A1：受験に本当に本当に特化してるってところがやっぱプロだな、って思う。

A3：学習に対する全てのプロって訳じゃないんだけど、ただ講座を提案してくれるっていう意味では、プロかなとは思う。

A2：なんか、受験のプロって感じなところは思ってたかな。学校って正直受験のプロではない？授業のプロではあるかもしれないけど。塾はそれを仕事にしてるだけあるな、っていうのは思います。

このように、学習全般ではなくとも、受験に特化した授業を行ったり、受講する講座を提案したりすることを主な仕事としている塾は、受験のプロフェッショナルであると考え、その意味で学校の先生との差異を見出していることがわかる。また、何年も受験生を見てきていることが、塾への信頼に繋がっているという回答も見られた。

次に、塾の持つ情報量や、客観的証拠を信頼しているということである。塾は、特に全国に展開している大手の場合、全国の大学や長年にわたる受験生に関する情報が集まっており、自分の成績を広い視点で見ることが可能になる。学校の中では同程度のレベルの生徒がごく一部集まっているだけであり、また目指す大学もそれぞれ異なっている。それと比べると、同じ大学を目指す様々な生徒の情報を基に自分の成績を見た方が、受験には有益だと感

じているようだった。インタビューでは、次のような回答が見られた。

A1：センター何点でした、って言ったら、じゃあ「去年のセンター〇点の人は、大体何人受かって、何人落ちてます。どうかな？」みたいな。そういう資料とかデータとかをいっぱい持ち出してきて、志望校決めたりとか、塾はそういうことしてくれるから、その点ではすごいなって思ったし、すごい利用したいなって思えた。

A2：学校の先生は、定期テストとか実力テストとかのデータで、少ない集団のなかで話をしたりとかするところもあったし。まあ、模試受けてないときとかは特に。でも塾とかだと、広い視野で、トータルでこう、判断とかアドバイスとかしてくれるし、視野が広いからこそ信頼できるっていうのはあったかな。

A2 へのインタビューでは、客観的に自分の成績を見られることで安心できた、との回答もあった。

さらに、学習する環境の面で塾を必要としているということも共通していた。多くの進学塾には、「自習室」という部屋が存在している。その名の通り、受験生が自習をするためだけの部屋であるため、勉強するための環境が整っている。インタビューでは、自習室の重要性を感じている回答を全員から得ることができた。

A2：自習室とかはめっちゃ（行っていた）。自習室があるから塾に行ってた、っていうところもあるかもしれない。家だとできないから。

A3：勉強する場が与えられるというか、塾は。私、結構自習にも使ってた、もう本当に塾にずーっと入り浸ってたから、塾では勉強、家帰ったらもう携帯、みたいな感じで。割と公私を分けるみたいな感じだけど、勉強する場はもう、塾だったから、そういう意味では良かったかな。

A1：受験関係あれこれの環境が良かった。その、周りに結構モチベーション高い人が、合格目指して頑張ってる人が集まる環境に身をおけるっていうことが、大手の塾に通うことのメリットかなって思う。

A2、A3 の回答からは、家では勉強できないことから、勉強する場所をあえて塾に作ることで学習にメリハリをつけていたことがわかる。特に個別指導塾に通っていた A2 は、受験指導よりも、どちらかといえば自習室をメインに使っていたようだった。また A1 は、受験に向けて勉強している仲間の姿を見て自分のモチベーションを高められる環境があることに、塾のメリットを感じていた。

このように、塾へ通った学生は塾に対して良い印象を抱いていたが、対象者の中には、自分から望んで入塾していない学生や、通塾する前には、塾に通うことは大変だと思っていた学生もいる。しかし、入塾する前と後で印象が変わったか尋ねたところ、そういった学生の場合でも、塾に通ううちに印象が良くなったようである。

A3：集団とか映像とか、やっぱ、パーソナルな感じじゃないのかなって思って。そういうイメージはすごくあったね。(中略) まあ入った後の方がイメージは良くなったかな。意外と寄り添ってくれるやん、みたいな。

A1：もうしんどくて、嫌で、苦で、やめないかなって不安だったけど、実際行ってみたら、そんなこと全然気にならないくらい楽しかったから、授業が。うん、思ったより楽しかった。

A3は、集団指導塾や映像授業を行う塾に対してあまり良い印象を抱いていなかったようだが、1人1人に寄り添ってアドバイスをしてくれたことが、印象を変えたと語っている。一方A1は、授業が自分の想像していたものよりも面白く、楽しく通えたと語った。

そして、学校と塾の役割を分担しているという結果も得られた。このことは、本研究で当初考えていたように、「塾に行けば安心」という意識がある、とまではいえないということを示唆する。

A3：学校はインプットの場所で、塾はアウトプットの場所で、まあ家は寝る場所みたいな感じの、三角形って感じだったから、私にとって塾は、勉強をする場所。

A1：極論言っちゃえば、受験には塾さえ行ったら受かるのかもしれないけど、私はそんなことはないと思ってる。確かに、自分が機械だったら塾行だけで受かると思うけど、機械じゃないから、塾だけじゃ受からん。学校の支えも必要だし、学校に行って友達と会うことも必要だったし、それがあって受かったみたいな感じ。

A3は「学校はインプット、塾はアウトプットの場所」、A1は「塾は受験勉強、学校はサポート」というように、学校と塾の役割分担をしていることがうかがえる。つまり、受験指導や情報量の面では、学校より塾の方が優れているという印象を持っていても、塾に全幅の信頼を置いている訳ではなく、学校にも一定の信頼を置き、両方を効果的に利用していた。

次に、通塾しなかった学生について検討する。通塾していない学生は、やはり塾へのマイナスイメージを持っていた。インタビューでは、以下のような回答があった。

B1：時間に縛られるじゃんね。この時間までにこれをやって、次はこれで、みたいな感じで時間が制約されてるから、思ったより復習できないっていうことがあると思うんだよ。

B2：(夏期講習に行ってみて) すごいあの、賢そうやな、って周りの人を見てしまって。その教室の雰囲気も嫌やったし。

B1は、塾で授業を受けることによって時間が拘束され、自分の復習の時間が削られることを懸念していた。またB2のように、一度夏期講習で塾に行ってみたものの、雰囲気が合

わず通うのをやめたケースもある。塾には、合格に向かって勉強をする生徒がたくさんいるため、緊張感が張り詰めたような独特な雰囲気があり、B2のように、その雰囲気が苦手な人がいれば、先述したA1のように、それをメリットと捉え、モチベーションを高める人もいる。またB2に、「塾に行くと成績が上がる」というイメージがあったかどうかを尋ねると、次のような回答があった。

B2：宣伝とかみたら、すごいそういうこと言っとるけど、実際はちゃうやろな、って思いながら見てた。なんかその、塾に入ったとしても、最終的に勉強するのは自分やん、みたいなことを思っと思って、そやで、そういう宣伝見たら「はあ？」って言っと思った。

大手の進学塾は、毎年有名大学の合格者数などをホームページやパンフレットで公開し、塾のメリットを宣伝している。B2はこうした宣伝や広告を疑問視し、塾に通う、通わない以前に、まずは自分がきちんと勉強すべきだと思っていたようだ。

しかし、塾にマイナスイメージを持っていたとはいえ、通塾する人に対して羨ましいと感じたり、自分が通塾しないことに不安を抱いたりすることはあったことがわかった。

B1：冬休みとか、自分が孤独な時、先生のサポートも受けられなくて孤独な時っていうのは、すごい羨ましかった。「ああ、周りから問題が降ってきていいなあ。こっちは自分で問題を探さなきゃいけないんだぞ。」っていう感じだった。

B2：私は塾に行っていないから、受験したい学校の専門の講座みたいなものを取っていない訳で、(成績が上がらないのは)そのせいかなって。ちょっとそのせいにしようとしたときに、不安になりました。(中略)羨ましいな、っていうのはあって、塾の自習室が使えたりとか、塾がこういう勉強したら効率が良いよっていうのを教えてくれそうって思っと思って。道のりを塾が示してくれそう、って思っと思って。

このように、通塾していない学生は、教材や問題を提供してくれたり、受験までの道のりを示してくれたりすることを塾のメリットだと感じており、それを享受できず、自分で全て計画を立て、勉強しなくてはならないということに不安を抱き、通塾している人に羨望を感じていたようだ。しかし、どちらも自分なりに妥協点を見つけ、自分を奮い立たせていた。

B1：塾の子達が自分よりやっっていないっていうことを言い聞かせて、頑張った。

B2：なんか、もうしょうがないやん、って思っと思って。(中略)自分でするしかないな、ってなっってた。

また、通塾した学生よりも、通塾しなかった学生の方が、「学校で十分」という思いが強かった。この傾向はB1の回答に特に顕著で、塾に通わなかった理由を尋ねた際に、以下の

ような話があった。

B1：先生たちに信頼を置いていた、っていうのはあるね。先生のもとでなら、教え方も上手だったし、進路のサポートとかもしてくれる学校だっていうことを入学当初から聞いてたから、別に塾に入らなくても、この学校で先生に教えてもらったことを復習して、っていう風にやる戦法の方がいいなと思って、学校の勉強でやってやろうと思いました。

B1は、学校の先生に厚い信頼を置いており、塾に通わなくて良かったと思うか、と尋ねた際にも、「学校に対する信頼は揺らがない」と話した。またB2についても、B1ほどの学校への信頼はなかったものの、信頼できる先生がいた、という回答が得られた。つまり、学校や学校の先生への信頼感が高いと、塾を必要としにくくなると考えられる。

この他、詳細を避けるが、Bグループの2名は、どちらも高校受験の際には個別指導塾に通っていた経験があることが調査でわかった。しかし、どちらも塾それ自体の効果は感じておらず、このことが塾に通わないという選択に影響していた。

(2) 塾に対する評価の形成要因

この節では、(1)で述べた塾に対する評価が、どのような要因で形成されているかを検討する。

まず明らかになったのは、学校への信頼度の差異が影響しているということだ。(1)で述べたように、通塾していない学生は、通塾した学生よりも学校や学校の先生への信頼度が高く、塾に頼る必要性を感じない一方で、通塾した学生は学校で行う授業や受験対策では物足りず、その部分を専門とする塾に頼ろうとする傾向があった。小宮山(1993)によれば、通塾する人には「塾に行かないと合格できない」または「学校の授業だけでは不安」という状況があるということだったが、大学受験では、学校での受験指導への信頼が、通塾の有無や塾の必要性の感じ方に大きく影響しており、「学校の授業だけでは不安」ということに関しては共通している。通塾した学生にとっては、高校の授業で多くの時間を割いて受験指導を行っても、それで満足できるというものではなかったようだ。

また、塾への評価には、友人や先輩、親などの周りの環境が関連していた。インタビューにおいて、通塾した学生には通塾したきっかけや、その当時の塾への印象を、通塾しなかった学生には通塾しなかった理由を尋ねた際に、以下のような回答があった。

A1：いっぱい模試とか受けてたりすると、いっぱいパンフレットもらったりとか、あとは、圧倒的に塾通いして受験する人の方が多かったりとか、そういう周りの状況見て、「受験＝塾通うこと」みたいなのが出来上がってたんだと思う。

A2：大体先輩達が入ってた感じだったから、入るのが当たり前、みたいに思ってた部分もあるかな。

B1：塾は、学校の勉強にアンチな人達が行ってたのよね。だから、学校の勉強でのびないから塾に来ました、みたいな、そういう消極的な理由で行ってる人たちが多くて。だから塾の雰囲気も必然的に、やる気がないっていうか、(中略) やっぱ集中力がないし、塾に行っても遊んでたりしてたのよ。そんなところに行ったら、自分の学力もそいつらたちに侵されてしまうんじゃないか、っていう心配があった。

A3：親が「もうそろそろ塾に入りなさい」みたいなプレッシャーをかけてきて、体験にむりやり連れて行かれて、まあ体験までしたらもう入塾みたいな感じで、流れで入りました。ほぼ親の意思ですね。(中略) 学校だけじゃなくて、塾でやらせることによって成績が良くなるっていうのは、親の実感としてあったらしくて。

B2：外に頼らないこととか、お金を使わないことで褒められる経験が多くて。

A1、A2、B1は、周りの友人や先輩の影響を受けている。A1とA2は、通塾している周りの人の姿を見て、通塾することが当たり前だと考えていた。つまり、「受験といえば塾」という固定観念の形成過程には、通塾している人からの影響が関連していたといえる。しかしB1は、同級生が塾に通っている状況があったものの、雰囲気が悪かったため、塾に通うことは逆効果だと考えて通塾しなかったということがわかる。通塾している人から受ける影響は、必ずしも良い影響だけではないようだ。

A3とB2は、親の影響が大きい。A3は、親が塾に対して好印象を持っていたため、ある意味強制的に塾に通うことになった。一方B2は、お金を節約することで親に褒められる経験から、多額の授業料がかかる塾に通わないという選択をしていた。つまり、親の塾への考え方や金銭感覚が、通塾の有無や塾への評価に影響を与えているといえる。

3. 考察

本論は、「子どもはなぜ塾へ行くのか」という問いに起因する。小宮山(1993)は、進学塾に通う理由について、「塾に行かないと合格できない」という不安感があるためだとしていた。しかしインタビューを行い、大学受験をする高校生の場合、学校にも一定の信頼を置き、塾を絶対視してはいないということがわかった。つまり通塾する人は、「塾に行かないと合格できない」という不安感よりは、「塾に行った方が合格に近づく」という期待感を持っていると考えられる。

そして、こうした期待感や、「受験といえば塾」というイメージ、また通塾しなかった学生における塾へのマイナスイメージは、学校への信頼度や親の信念、友人や先輩の様子といった周りの環境に大きく影響を受けていることがわかった。当初本研究では、図1(次頁)の左図で示すように、塾に絶対的な価値を見出していることが通塾に繋がると想定していたが、調査の結果は、塾に対する評価の形成過程には複雑な構造があることを示唆するものであり、当初の想定とは異なっていた。また今回の調査では裏付けることができなかったが、有海(2011)の調査において、中央都市部よりも地方の方が、学校の教師と信頼関係が強く

なるということがわかっているため、学校への信頼度は社会的要因と結びつきうる。さらに、親や友人などの周りの環境も社会的要因と関連するものだと考えられる。よって、高校生の塾に対する評価の形成要因に、社会的要因があると言えよう。このことから、図1の右図のように、社会的要因が影響する様々な要素が塾に対する評価を形成し、通塾するかどうかの意思決定を左右するのではないか、という新たな仮説を立てることができた。

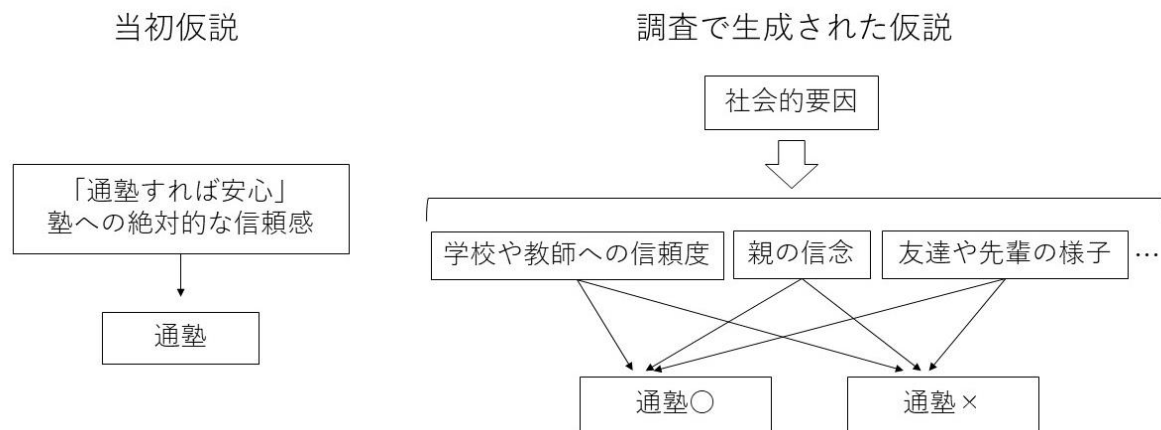


図1 高校生の塾に対する評価の形成要因の仮説

社会的要因が影響するという事は、様々な属性の学生にインタビューをすると、また異なる結果が得られる可能性があるが、今回は残念ながら、名古屋大学生、また公立高校の出身者しかインタビューを行うことができなかった。今後の課題として幅広い属性の学生に調査を行うとともに、社会的要因に着目することで調査から生成された仮説をさらに詳細に検証する必要がある。

参考文献

- 小宮山博仁 (1993) 『学歴社会と塾—脱受験戦争のすすめ—』 新評論
- 千葉誠一 (2017) 『塾・予備校—2018 年度版』 産学社
- ベネッセ教育総合研究所 (2017) 「学校外教育活動に関する調査 2017」
- 有海拓巳 (2011) 「地方／中央都市部の進学校生徒の学習・進学意欲—学習環境と達成動機の質的差異に着目して—」 『教育社会学研究』 第 88 巻 185-205